

ひ

クボタからのご提案

夢農業

西日本版 No.20

特集

今求められる環境保全型農業

●きらめき ほくりく夢農業2009～営農レーダー～開催

10月6・7日の2日間、石川県白山市で開催された「きらめき ほくりく夢農業2009」。大規模農家が抱える課題にハード・ソフトの両面から解決策を提案。実演・試乗を通じて体感していただくと共に情報交換の場として賑わいました。





▲ケールの苗づくりに気を配る末海さん



▲2連マルチが馬鈴薯のうねづくりに活躍

「アントンコーン(飼料用トウモロコシ)なら茎と葉・子実が利用できるため濃厚飼料並みの栄養素が維持できる『嗜好性が向上する』『単位面積当りのTDN(可消化養分総量)が牧草の2〜3倍もあり飼料価値が著しく高い』『繊維質が豊富』『乾燥物摂取量が多い』ま

法人のある志布志地域での金額は、農業全体では719億円、そのうち498億円が畜産となっています。この約半数が肉用牛と豚で占められていて、飼養頭数は20年前の20万頭が維持されている一方、畜産農家戸数は約50%に減少し大規模化しています。これらの数字が表すように当地区では畜産がいかに重要な産業であるかが伺われますが、坂上さんがコーンを栽培し粗飼料供給を事業化したのは意外にも豆科やその他多数の緑肥作物の栽培からでした。

多く、青刈りしてすき込めば翌年、翌々年の連作予防につながります。また、Cの循環にも役立ちます。そのすき込み作業を見ていた畜産農家から発せられたのが「もったいない。すき込みするくらいなら餌にするからわけて欲しい」という意外な、そして切実な言葉でした。これが平成14年、ソルゴー栽培のときでした。

開発した『サイロール』

耕畜連携にふみ切ると決めた坂上さんは考えました。①頭数に合わせた給餌をどうするか②流通をどうするか③栄養価を落さず供給するにはどうするか④畜産農家が満足する価格はどれほどか、などです。

そこで坂上さんが結論つけたのは『ロール成形すれば品質低下がない』『流通に適している』『アントンコーン(飼料用トウモロコシ)なら茎と葉・子実が利用できるため濃厚飼料並みの栄養素が維持できる』嗜好性が向上する『単位面積当りのTDN(可消化養分総量)が牧草の2〜3倍もあり飼料価値が著しく高い』『繊維質が豊富』『乾燥物摂取量が多い』ま

た耕地面積の狭い国内での自給飼料として最適な作物であるといったメリットからです。そして様々な研究の結果、年2回の作付けに成功したのですが、作物や気候条件から収穫を早く終了させなければならぬという課題が発生したのです。そこで坂上さんが取った対策は『収穫したコーンを一度、バンカーサイロに詰め込み、踏圧し、3カ月間程嫌気発酵させた飼料を取り出し、すぐさま今度はロールに再成形することでした。これなら空気の侵入による品質低下の心配がありません。平成18年にこのシステムを開発しました。乳酸発酵が進んだ粗飼料を細断型ロールペーラで再梱包してロールするからでしょう。いい香りがし、品質の低下がありません』と、何年も開発に注いだ情熱とアイ

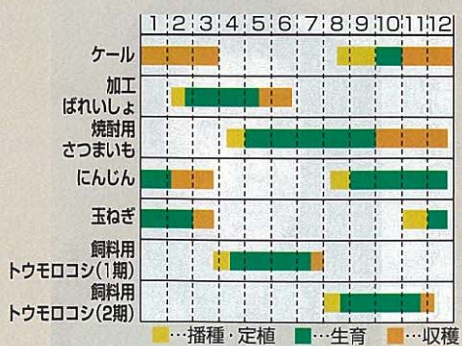


▲巨大なバンカーサイロで乳酸菌発酵させる

▼事業として認められた証し、A1大賞



現在の栽培体系



「ハウス野菜は植えてから育てていくのに対し、露地野菜は植えるまでが勝負」という坂上さん。会社での農業経験者は坂上さん一人だけですが、野菜や粗飼料の栽培管理がスムーズに行われ、実績を上げてきているのは10数年前から使用している表計算ソフトがあるからです。現在は専用に開発した『農業工程管理システム』により「日ごとの見回りをしなくても作物の状況がつかめる」と、農業もITを駆使することで、経験のない人でも参加できる組織づくりが必要だといいます。

栽培管理はすべてデータベースで

「ハウスの野菜は植えてから育てていくのに対し、露地野菜は植えるまでが勝負」という坂上さん。会社での農業経験者は坂上さん一人だけですが、野菜や粗飼料の栽培管理がスムーズに行われ、実績を上げてきているのは10数年前から使用している表計算ソフトがあるからです。現在は専用に開発した『農業工程管理システム』により「日ごとの見回りをしなくても作物の状況がつかめる」と、農業もITを駆使することで、経験のない人でも参加できる組織づくりが必要だといいます。

環境保全につながるCの循環 地域農業を守る耕畜連携

鹿児島県志布志市志布志町
農業生産法人
有限会社さかうえ
代表取締役 坂上 隆さん



▲2台の細断形ロールペーラで適正な長さに裁断する

「子供が生野菜を食べている姿を見ると、農業やっていて良かったなあと思う。感じる」という坂上さん。農業生産法人の代表者です。大学生の頃からの夢であった農業への熱い思いを実現し、今や鹿児島県を代表する企業へと発展させました。そして新感覚を生かし、更なる発展を続けています。

環境保全はCの循環から

「作物はすべてCO₂を吸ってO₂を出しています。ここで残るのがC(炭素)です。炭素は酸素と結合すると有害物質に変化します。逆に上手く利用すれば人間に有効な物質ですよ。例えば堆肥はC対N(窒素)で構成されていますね。Cを多く含む堆肥が良質な有機肥料であるといわれています。有機肥料を多く使うこと、それがCを地中に戻すことにつながります。つまりCの循環『カーボンサイクル』です。この炭素をうまく利用することが地球温暖化の防止につながるのではないですか」。坂上さんは、Cの有効利用のために農業に動いていると胸を張ります。一方、「水田から出るメタンガスも温暖化に影響を及ぼ

「大学生の時に悩んだのです。何が幸せか。農業が一番幸せだ。今実感しています。」



しているようですが、これは間断排水などで減少します。幸い畑地はメタンガスを放出していませんが、どちらにしても地球環境保全は農業が担っているんですよ」。Cの循環を心がけていた坂上さんは、早速有機肥料の施用を行いました。

畜産農家の声を受けて始まった環境にやさしい耕畜連携

鹿児島県の農業産出額を平成18年実績で見ると、58%の4079億円が畜産部門で占められています。

鹿児島県志布志地域の肉用牛

